

Raffine Journal vol.21



途中の状態が、
役として立つとき

言葉は、ときどき整いすぎる。

わかったように並ぶその形の中に、
まだ触れていないものが、
静かに残っている。

あるインタビューを読んだとき、違和感が残った。

語られている言葉は整っている。
けれど、その整い方が先に立っていた。

「経験していないから分からなかったと思う」
「客観的に見たことで両方の気持ちがあった」

どちらも、理解の形をしている。
けれどその言葉は、触れる前に整えられていた。

違和感は、内容ではない。
言葉が置かれている状態から生まれていた。

「経験していないと分からなかったと思う」

その言葉は、謙虚さの形をしている。

理解は、経験の有無では決まらない。

どこまで自分の内側に触れているかで、
他者に触れられる深さは変わる。

経験があるかどうかではなく、
触れられる領域がどこまで開いているか。

その差が、そのまま言葉に出る。

「どちらの気持ちも分かると思いました」

その言葉は、衝突を均す形をしている。

本来そこにあったはずの温度差は、
言葉の中で、すでに均されている。

どちらかに触れたときに生まれるはずの揺れは、
その前に整えられていた。

整った理解の中に、
触れきれしていない部分だけが残っている。

その状態は、誤りではない。

むしろ、
今回の役の輪郭と一致していた。

自立しようとしている途中。
まだ、すべてを引き受けきれない段階。

理解しきれないまま、理解しようとする。

その途中にある状態が、
言葉として出ていた。


表現は、理解の完成から生まれるわけではない。

むしろ、
触れきれていないものが残っている状態のほうが、
その人の現在地を正確に映すことがある。

整った言葉は、形としては美しい。
けれど、その前にある状態には、
どこまで触れているかが、そのまま残る。

そしてその状態が、
役の輪郭と一致したとき、
表現は成立する。

途中にある状態が、
そのまま、役として立つことがある。

A dark, atmospheric scene featuring a dark sphere on a dark surface. A soft, light-colored beam of light originates from the left, illuminating the text and casting a subtle glow on the sphere and the surface below it.

R.

Raffiné Journal vol.21
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné